

人生の喜びを感じてほしい

プロテニスプレーヤー クルム伊達 公子

KIMIKO DATE-KRUMM



PROFILE

1970年京都府出身。小学校1年からテニスを始め、中学・高校時代から活躍。89年にプロに転向。日本人女子テニス選手として、史上初の世界ランキングトップ10入りを果たす。96年に現役引退、08年に復帰。98年から、日本全国の子どもを対象にした活動「カモン!キッズテニス」を開催。02年、JICAオフィシャルサポーターに就任してからは、その活動を途上国にも広げている。

6歳の時にテニスと出会い、ずっと、テニスと共に人生を歩んできました。自分に対する自信、他人を思いやる気持ち、世界に出る機会、そして各国にできたたくさんの友達…。振り返ってみると、私は人生で欠かせないもののすべてを、テニスを通じて得てきたような気がします。

一度現役を引退した後、これまで応援してくれた日本の皆さんに恩返しをしたいと、子どもたちを対象に「カモン!キッズテニス」を始めました。単にテニスの技術を伝えるだけではない。スポーツを通じて、机の上では学べない、何かを感じてもらうきっかけになればと思ったからです。そして、2002年にJICAのオフィシャルサポーターのお話をいただいてからは、その活動を途上国でも展開しています。

実は私にとって、テニスはずっと

“先進国のスポーツ”というイメージがありました。ボール、ラケット、コートなど、まずは“道具”がそろわなければ、練習も試合もできないからです。それ故に、対戦する選手も、試合をする国も先進国で、選手時代は途上国とは無縁でした。

でも引退後、縁あって中国に行く機会があり、路上で物ごいをしている子どもを見て衝撃を受けました。今まで目にしたことのない世界…。私にできることは何だろうと考えた時に、そこにあったのが、やはり“テニス”だったんです。

途上国では、ラケットを見るのも触るのも初めてという子がほとんど。興味津々の目で私を見ながらも、最初は「海外からお客さんが来た」と、とても緊張しています。それでも一緒にボールを打っているうちに、いつの間にか、元気な笑い声があふれて

いるんです。不思議ですね。

正直言うと、途上国でキッズテニスをやることに迷いが生じたこともあります。私が帰った後、彼らはずっとテニスを続けていけるとは限らない。逆に、テニスの楽しさを知ってしまうことは、彼らにとって酷なのではないかと…。でもラケットを握る彼らは、本当に生き生きとしています。テニスを通じて、“生きる喜び”を感じてもらうことだけでも、決して無駄なことではない。そう思えるようになりました。

現役復帰してからは、なかなか途上国に行く時間がないのですが、国内のテニスの試合で中古ラケットの回収を呼び掛け、途上国の子どもたちに届ける活動を続けています。現場に行かなくてもできることはある。あなたの家に眠っている何かが、国際協力のきっかけになるかもしれません。